

精神科の先生「うーん。そやねえ」

田所

私「回すの忘れてました。」

先生「ほいほい。」

私「でも、そうっすねえ、あー……」

先生「いやでもまあ、いつも言うてる、大半の人はそんなに頭良くないん、バカなんだよって言うてる、ところで、まあ典型例としては、やっぱり取り上げざるを得ないところやね。」

私「そうですねえ。」

先生「うーん。」

私「まあまあまあまあ、もう、あのー、アクションを起こしてくれなかつたら、それでいいよって感じですねえ。」

先生「うんうん」

私「もうほんとに、ほんとにもう、なんか、次ほんとにおつきな事やってきたらまあ……また、考えないといけないんですけど。」

先生「うん、まあ宗教関連の事はもう本人は絶対変わらへんやろうから、まあそこに関していうかそこに触れる形で、関わってきたらまああのー、また、断絶してるぞって見せつけるような。」

私「はい」

先生「所作をあえて示さなしゃあないなって思うけど、」

私「うん、いやあ……」

先生「信じてって言葉もそうやけど、なんか自分にその悪意はないとか、誠実に、良い、良かれと思ってっていうことはあの、アピールしておかなあかんってのはあるわね。」

私「もう、すごいつすよねえ。未だになんか、こちら側があたかもある程度の信用・信頼を持ってるかのように振舞ってる……」

先生「ふふふっ」

先生「んー、や、持つてるかっていうか、自分が良い、良ければ、相手が良いと思ってくれて当然という、ことがあるね。……いやあそれはこつ、信仰心みたいなもんやわな。」

私「はい。もう、うん……こつ、自我の中というか自己同一性の中に取り込まれちゃってる。」

先生「うんうん。」

私「しかたがない……」

先生「そうやって生きるのが正しいという風に、あのー、思ってしまつたらもう、こつやって、そこで止まりっぱなしやからねえ。」

私「……いやあー、いやあ、しょうもないっすねえほんとに。しょうもない。」

先生「うん、まああの、能力が足りないって切り捨て方もあるけど、まあやっぱり弱いんよな。」

私「うん。」

先生「うーん、そこはもうあの、気の毒やなと思うところもあるわ。」

私「……やーなんで、なんでこつ、んー、分かんねえの、まあまあ、分かんないから分かんないんでしょ。こつ、ふふっ、やっぱりこつ、分かるようになった人は分からない人間は分からないし、分からなくなるし、分

からない人間って分かることを分らないですよ。……うん、むずかしい……まあ、んーまあ、血縁者に関してはもうなんかほんとに、まあどうでもいいから。」

先生「ふふふ」

私「まあどうでもいいですけど。」

先生「まあね。まあそこは、別に、血縁だとは言っても、お母さんが自分で生きていく方向に、そこと絡み続けないかん道を選ばなければ、全然いいことや。」

私「はい。……そうですね。」

先生「でもやっぱりこうやってあのー、自分のその、弱さとか至らなさとかいうのを、あの、変えないかとか、あのー賢くならないかん強くないかかんって言う事を、あの自覚、するっていうこと、耐えられる人間と耐えられない人間がいのよね。」

私「あー」

先生「耐えられない人間はその、見なくて済む、逃げて済むように、あの、してもらえない理屈があったら飛びつくし、それを取り込んで自分は今こうこれでいいって言ってしまう生き方にやっぱなっちゃうよね。なんかあのー、全く、なんて言うん、違うものを持って生まれてきたとは思わへんのよ。田所さん、と例えばお母さんとかね。」

私「ああ」

先生「でもあのそれがこう、分かってしまつとか、克服せなあかんって言う風に、背負えてしまつか、あの背負う事をそもそも、拒否し続けたとか、まあそうとこでどんどん違つていったんやるなという感じがあるよね。」

私「うーん……」

先生「いやもうお母さんが反面教師になったから田所さんはあのーそうはあかんと思って、こういう道に來たのは、あるやろうけどね。」

私「そうですね。母親というかまあ、あの家、全てですねえ。」

先生「ふふふ。」

私「なんかあの、うーん……」

先生「まあ、まああの、逆説的にあんたらのお陰で今の俺があるという、要素はどうかにはあるー感じやんね。別に感謝する、筋ではないけど。」

私「はい。」

先生「……あのー本当にどうでもいいわ知らんわって言えるように、なるっていうのは、そういうところでこう、なんか絡まつたしんどさを、どうぼくすか、を考えて生きてきたっていう段階を超えないと終わらんのよね。うん。それが過ぎると、ああそんな人もいるねそんなこともあつたねえで、」

私「ふーん。」

先生「今の自分の、なにも動揺させない、あの、要素やわって言う風に、あのー、距離を変えずに、とか感情的にも反応せずには付き合えるっていう、のはいずれ段階的にはくるかなあつて期待はするけど、まだあの、そこをどうやって終わらせるかとか、自分を、作り上げるときに、これをどう、どつという風に、あの、始末つけるか自分の中でも、あの、正解をつくるかって言う事を、まあやっぱもがいてる最中つてのがあつたので、やっぱあの、揺さぶられるというか、ちょっと意識したときに、自分が、穏やかではなくなる反応にはなるかなあつて思つたね。」

私「うーん。」

先生「いやもう、間違いないこう、なんやこう、ちゃんと切り捨ててというか自分にその嫌な、要素というか、あの、まあ方向性、修正つていうの、排除して、矯正して、あの、次に進もうという発想にはなつてるので、まあ時間の問題でいずれどうでもよくなる日があるかなあつて思つたけどね。」

私「そう、ですねなんかそう、なんですよねなんか最近なんか、その辺の感覚、まあわりかし強くて、強くてというか、こう、環境が一回、そう新しい環境に変わって、」

先生「うん。」

私「半年ぐらい過ぎたら、なんか全部、こーう、ほんとにどうでもよくなり
そう、気がしてて、」

先生「うんうんうん。」

私「あー、家のこともそうですけど、あーのー、大学生活で関わってきたク
ソども、」

先生「ふふふふふ。」

私「とか、まあ、前の付き合ってた人とか、」

先生「うん。」

私「あの辺が、なんか、うん、こーう、なんかもう一個、きつかけがあれば、
なんか、こーう、そうですよね、あーの、まあ思い出なんてものには絶対な
らないですけど、」

先生「うん。」

私「こーう……うん、こーう、うん、それこそ、肉芽みたいな感じに、肉
芽が吸収された後の、」

先生「うんうんうん。」

私「癬痕みたいな感じに、なっていくかなあってという感覚が最近、まあ、最
近というか、うーん、なんとなく、こーう、多分、一か月間くらい持っ
たのをいま話しててぱっと、上に昇ってきた感じがして、」

先生「うーん。」

私「うーんなんか、うーんそれこそ、結構、そうですねあー、就活で、忙
しくなる前とか忙しく動き始める前、」

先生「うん。」

私「くらいまではなんかもう何かしらにつけてなんか、こーう、ああ、思い
出し憎みみたいなことを、」

先生「ああ。」

私「結構してたんですよね。二週間に一回とか一週間に一回みたいな、夢、
なんかその、出てくる、人は、まあ毎回変わるけど。」

先生「うん。」

私「夢にも、まあ毎日一人は誰かしら出てきて、その、あの不快な、不快な
目覚めをするんですけど。」

先生「うん。」

私「あー、ぱっと目が覚めるみたいな、なんか毎日あったんですけど、な
んかこーう、先の事を、固めつつある、状況に、まあほんとの意味で、踏み
込んだわけじゃないですか試験受け始めて。」

先生「うんうんうん。」

私「で、なんか、あー、役所の訪問行ったりとか、なんかこーう新しい人間
関係ができそう、というか新しいコミュニティができそうところ、に
触れていつて、経過の中で、まあーなんか、その辺、が、だんだんと薄
れてきたなあという、こーうなんか、ふと、話題に出されたり、してもこ
う、まあ、それまでは、結構、表面では笑ってますけど、なんか、でたら
めのおべんちゃらーみたいな感じの、やってますけど、中身はほんとに
はらわた煮えくりかえってるみたいな。」

先生「うん。」

私「感じの、反応だったんですけど、なんかわかりかし、うーんなんか、こ
う、ああでも若干防衛機制みたいなんは残ってますけど、なんと、なん
かどうでもいい、は、まあまあ、まあ今はまだなっていないで。」

先生「うん。」

私「あー、かわいそうな人間たちやなあっていう風にこーうある種、」

先生「ああ。」

私「思える、なんかたぶん、こーう、一個次の、憎む一個次の段階じゃないで
すか。」

先生「うんうんうんうん。」

先生「うん。」

私「中ですけど、かわいそうな人間、まあ実際かわいそう、というかまあ
愚かなやつらだあって、感じ、まあこーう……あー、客観的って言葉あん
ま好きじゃないですけど、まあ愚かじゃないですか。」

先生「うん。」

うち「まあまあ、うちの、客観からみれば愚かじゃないですか。でまあその一個、あのー、一つ機制を突破した先の機制に、入ってきたなあっていう感じが、して、でそこをだんだんだんだん、こつ、自分の、体験の中で、追体験していく回数が減ってきた、ので、夢に出て来るとか、まあ未だにまあ、出てくることは出てきますけど。」

先生「うん。」

うち「あの、実家の人間だったり、あのークソ、クソどもだったり、」

先生「うん。」

うち「付き合ってた人だったり、出て、きますけど、回数は減ってきて、で追体験する回数も減ってきたので、まあそのまんま、こつ……ゆるーく消滅していく、感じになんのかなあって。目には見える、傷として、残ってはいるけど、こつそれを、異質なものとして取り扱わなくなる、感覚、というかまあ、なんか、まあ、それこそ、傷跡みたいに、なんかこつ触って凸凹してたら意識向きますけど、なんか凸凹してないところで、」

先生「うんうん。」

うち「なんかちっちゃい傷というか、吸収されたところの、癍痕。まあ見たら傷跡だけど、いやまあ、在る。こつ、」

先生「うんうん。」

うち「在る。って、存在するだけだよねみたいな。感じの、ビジョンは結構見えてる、んで。」

先生「ふーん。」

うち「そうまあ、まあまあ、この、ほんとに、新社会人になったら、」

先生「うん。」

うち「まあそれどころじゃなくなるっていうのも多分、あると思うんですけど忙しさとかで、あるんじゃないかなあって。」

先生「うん。」

うち「思ってるんで、わりかしこつほぐれてきては、いますよねその呪縛みたいなものが。」

先生「うんうん……まあその、無理に、ほぐらせるとか無理に見ないようにする、感じないようにするとかじゃなくて、ちゃんとこつ、あ、自分の中ではもうそれ、それだけの価値が、なくなったとか、その、反応するだけのエネルギーがそこにあるの、つき込めなくなったなあっていう風に、変わっていった感じがあるわね。」

うち「うん。」

先生「すここつ、良いというか前向きな変化よね。やつぱり。なんか自分がこつ、今までいてた段階と違う段階に移る、違う状況に移っていったっていう風に、自分の中でこつ、そういう事に絡まってた状況が終わっていったっていう風に、なんかどっかでやつと理解しだしたというか、新しいことが始まったことで、そういう変化がどうしても起きるんやっていう事を、自分がなんかわかりだした感じやね。」

うち「そう、ですねー。」

先生「……うん。まあすこい、良いなんか変化やね。無理なことをして、あのーなんか頑張って乗り越えようとか、あの、なかったことにしようじゃなくて、自然にああなんか、過去の記憶の一点になるだけで、あの、意味、意味としてとかその自分の中の重たさとしては、なんか0にどんな近づくんだなあっていう風に、勝手にこつ変化が起きてるのを自分が眺めてる感じになってるよね。」

うち「そうですね、なんかこつ多分、こつ、まあ、消えはしないんですけどあの、永続性はあるんですけど、あのー、重みが0になって、」

先生「うん。」

うち「質量0になつてただそこに、在る。っていうだけみたいな、こつ、思い出だとか過去のことだとかそういう話には多分ならないんですけど、まあでもこつ付帯物として、かな、ただ付いてる、というか、こつ、うん……んーなんかこつ、んー目に見えないほくろというか。」

先生「ふふつ。例え、その例えが難しいけどまあうん。」

うち「なんかうーん一番近いのはまあそれこそこんな感じの（自傷痕）。」

うち「傷跡の、癍痕。みたいな感じなんですよねえなんか、そう、うん。」

先生「まあ、あの、新しいことは、ちゃんと就活うまくいけば、それこそ忙しくてそれどころじゃないとか、今現在とこれから先の事で、あの頭の中いっぱいになるから、過去のこともなんかほんとに取り合う暇もない、価値もないっていう風になっていくと思うんで。」

うち「はい。」

先生「まあそうなっていたら、色んなことが勝手に終わってるよねきつと。」

うち「そうですねえ、うん。」

先生「うん。そういう、なんかあの……自分が色々こう、まあ、積極的に頭を整理する感情を整理するというような、作業を頑張ろう……えっとそれそのものと取っ組み合わなくっても、自分のためになることを、やりたいことやろうとしてるだけで、そこは勝手にあのー、解決されたことになっていくんだっていうのがまあ、見えだしたっていう感じやなあ。」

うち「はい。」

先生「んーそれなんか正しい変化が起きてるよねえ。」

僕「なんかこう最近、なんか、ああ、こつ世界中心にまわってるなあ、僕って感じが。」

僕「んふんふん。」先生「はっはっはっはっはっはっは。」

僕「してるんで、うーん。まあいい感じではあるかなあ。」

先生「うーん。そやねえ。」

僕「……んーまあそれ以外の……あーなんか、でも、こつ、まあ、前の週末に。」

先生「うん。」

僕「あるって言ったじゃないですか、就活が。」

先生「うん。」

僕「二つ。まああれ終わって、で、まあなんか、こつー、相変わらず、なんていうんだろなあ、んー、やっぱりまだちょっとこつ身体にしみついてる感覚みたいなのは、こーう……まあ、面接の前とか、薬飲んで行っただんですけど、頓服、出してもらってたんで。」

先生「うんうん。」

僕「んーなんというか、あー、あつ、違う話を、先にこつちを話します。」

先生「うん。」

僕「〇〇の、試験が通ってたら、あのー八月の、一七・一八のどちらかで最終試験なんですよ。」

先生「ほうほうほう。」

僕「ほんで、××の筆記が通ってたら、一七日、に、二次試験なんですよ。」

先生「あら。」

僕「ほんで、まあ終わった後にそれを確認して、あーなんかどっちか選ばんといけんようになるかもしれんなあ。」

先生「うんうん。」

僕「ってなるじゃないですか。で、まあでも実際発表は八と九なんで、まだまだ先、というか。」

先生「うんうんうん。」

僕「まあ発表されてから、考えればいい、というか、」

先生「うん。」

僕「それまでは別に何にもこう、せつくものとして持ってなくてもいいじゃないですか。」

先生「まあ両方とも引つかかるというすごい嬉しい、」

僕「あ、はい。」

先生「事があつたときに、困るってことな。」

僕「はい。」

僕「で、なんかそこを考え……なんか一時期、二日間三日間くらい試験終わった後、」

先生「うん。」

僕「うん、試験終わった後というか試験中とかもですけど。」

先生「うん。」

僕「試験中と試験終わった月曜日くらいに、なんか、どうしようみたいななにかこつ、」

先生「うん。」

僕「焦りみたいななんか、高まっていく感じが、あーこれ被ったたらどうすればええんやろみたいな、なんか色々まあ、」

先生「ふーん。」

僕「やり方はあると思うんですけど、」

先生「うん。」

僕「どっちか選ぶか、なんか、時間帯別で、こつずれてたら行けるし、でもずれてなかったら、」

先生「うん。」

僕「とか、あと一七・一八どちらかって言うてるからまあ電話したらもしかしたら行けるかもしれないとか、まあ色々なんか、可能性、まあでもあの発表あるまで、そんなことに頭を悩ませなくていいじゃないですか。」

先生「うんうん。」

僕「で、悩ませなくていい、のにそっちになんか、まあ、いい、いいでしょ別について、まあいいでしょって言いながら別の作業してたんですけど、」

先生「うん。」

僕「こつ、隅に、」

先生「まあね。」

僕「こつ、出てきて、なんかこつ、未だにその辺の、こつ、タスクに関する……こつ、予期される不祥事に、対する、こつ……事前準備的な、焦り不安みたいなのが拭いきれてないなあっていう。」

先生「うんうんうん。」

僕「そんな時すこい実感して、」

先生「うーん。」

僕「でも、まあ、まあ、うーん……そこに関してはもう、何回も数こなしていくしかないよなって思いながら、」

先生「うん。」

僕「やってたんですけど、一回なんか、いつだったかなあ試験の前の、週から、」

先生「うん。」

僕「（カウンセリング）に行った週のどつかで、なんか、なんかすこい、頭ん中が煩雑になった時があつて、こつ、なんにも考えがまとまらなくなつてなんか、こつ思考の種みたいなの、こつ考え、考える、」

先生「うん。」

僕「ものの種みたいなの、頭の中ではこぼこぼこぼこつて生まれては消え生まれては消えみたいな。」

先生「はーはー。」

僕「感じになつてなんか、こつ目の前で試験勉強をするために本を開いてるんですけど、どんどん目が滑っていつて、」

先生「うんうん。」

僕「目が滑るだけだったらまだ疲れてる時とかあるんですけど、」

先生「うん。」

僕「その理由がなんかそついつ、なんか、こつ、何かを、考えようとしてる、兆し、の時点で、あのことを考えようこのことを考えようって思つた時点でこつなんかそれが消えるみたいなの。」

先生「うーん。」

僕「あ、すこいいつぱい起きて、こつそんな時になんか、あたしはなんか、ボールのなんか、なん、なんていつてたかなあ、んー、こつ、頭の中が、反射機構みたいな感じになつて。」

先生「うんうん。」

僕「あ、こつ、破壊性がある、運動エネルギーを持った、いつぱい、粒子が、」

先生「うんうんうん。」

僕「あ、こつ、ぶわあーってランダムに、攪拌というか、」

先生「うん。」

あたし「ぶつかられまくって、でその、その粒子自体まあ、そもそも最初なんか、おつき球みたいなものが、数個あって、こう反射していった中で、その反射であつたり、球同士がぶつかったりして、」

先生「うんうん。」

あたし「どんどん細くなっていて、なんか、で、どんどん小さくなって数が増えて、で最終的になんか、ノイズまみれっていうか、ノイズしかない頭の中、状態になって、こうほんとに、身体を動かすこと以外できないみたいな、こう、」

先生「反射っていうかなんかブラウン運動を見てるみたいなね。」

あたし「あー、なんか、ほんとに……あーの、でも最初の方、こう、あれやるかみたいな、あの、皿洗うか、皿洗うか球と、本読むか球と、勉強するか球と、あーやっぱりトイレ行きたいな球と、」

先生「うんうんうん。」

あたし「それがなんか動き始めてバーンってぶつかっていった、だんだんそういう、皿洗うかが、皿球と洗う球としよう球みたいななんかどんどん、こう、区切りがなされていって細くなっていった、最終的になんか意味を持たない、粒子の集合、集合が頭の中に、こう粒子たちが、吹き荒れてるみたいな、状態になって、こう、統率が失われてるというか、そんな感じになって、そんな時はなんかすごい落ち着かないし、やろつとしてることができないから落ち着かないし、」

先生「うんうん。」

あたし「そのノイズで自分が何をしたいのかもわからないし、なんか、すごい挙動不審で気持ち悪かったんですけど。」

先生「うん。」

あたし「まあなんか、次の日も若干、んー、マシにはなってたんですけどそんな感じで、まあでも二日後には、すっかり治ってたんですけど。うーんなんか、そう、そういう、こう、異質な、ことが、あつて。まあまた健全と言いつけるには程遠いなあつて。」

先生「そういう時はでもほんと薬、はよ飲んだ方がいいのよねえ。」

あたし「あー……」
先生「頓服をねえ。」

あたし「なんかそういうときって、効くんですかね。いま、あの、前そのー、デバスの効き目をめっちゃめっちゃ実感したのは、」

先生「うん。」

あたし「もう、あの……殺されるーみたいな、こう動的な、」

先生「うんうん。」

あたし「なんか、ああああああああー、やべえ。こう、すごい、感情の攪乱を伴った、」

先生「うんうんうんうん。」

あたし「感情を、そう、感情の、こういう、過剰、もう過剰も過剰な、攪乱、でなにも……なんか、手が付かなくなつて、こう、こう、胸、んー錆びた釘でほじくりまわされるようななんか痛みみたいな体験とかそういう、なんか、いつ殺されるかわかんないみたいな」

先生「うん。」

あたし「切迫感とかそういうものが緋い交ぜになって、手が付かなくて涙ぼろぼろ出始めるみたい時に、飲んで、スッ、それらが、こう潮が引いていく波が引いていくみたいに、こう、はああー、なくなつたわ。みたいな。あーねむたあ。みたいな。」

先生「うん。」

あたし「感じ、の、あのー、感覚はあるんですけど、なんかその時の感覚とは、全然違って一番、違う点がその感情の動きが全く伴ってなくつて、」

先生「うんうんうん。」

あたし「ただこの事象がまともでないみたい。」

先生「うん。」

あたし「統率、事象の統率が全く取れてなくつて、まあなんかそんな、めちゃめちゃ、こう、extraordinaryな、悲しみだとか、焦り不安みたいなのは、なくて、それ効く、んですか？そういうのに効く、もんなんですかね。」

先生「うん。あのー、」

あたし「はい。」

先生「感情的な反応はあんま伴ってなかったって実感はあるやろうけど、そのー、一つ一つのそのー行動の選択とか、あの思考の整理とか、そういうことに対してなんか、まずこれを終わらせようとかこれに、関心を持つてたら今はいいんだっていうような、まあそれで、上手くいくいくはずやっという、安心感がそもそもない状況やつたはずなんよな。」

あたし「ああー。」

先生「あのー、切迫してるとか、つらいとかはないけど、先これ、いやこつちのほうがいいかな、とかなんかこう、これではないんじゃないかみたいな、こと含めて、」

あたし「あーはいはい。」

先生「あの、頭の中が一つのことにとどまるとか関心を持つことを、許せなくなってるような混乱がまあ、わーっておきてるんですけど、そうやって、一応やっぱりあの感情じゃないけど神経の活動自体がやっぱりあの、やらないでいい高ぶりがあるんですよ。」

あたし「あー。」

先生「だからそこをちょっとこうなだめるって意味ではデパスとか安定剤でいいんですよ。」

あたし「あ、そうなんですな。」

先生「うん。だからあのちよつと飲んで、あのむしろ、そんなたくさんの事に、あの意識持てないとか注意が向かない、気づかないくらい、ちよつと頭を鈍らせて、あの最低限の事しか、興味が持てないというか関心が、あの持てないみたいな緩んだ状態を作って、でやれることだけやろうかって収まるっていう風に、」

あたし「あー。」

先生「していったほうがいいので、今回それ一日二日で済んだからいいけど、その混乱ってあのーブレーキ掛けへんかったら、あのーちよつとね、

あの、質が悪いというか、長続きして脳がどんどん疲れる、あのー、原因が明確なものがなかったとしても、その頭の構造から勝手に鬱っぽいような神経の疲れ、しばらく動けませんかってなるような、あの、燃料の枯渇ぶりっていつのは出ることはあるので、」

あたし「あー。」

先生「ちよつと早めに薬飲んでそこから脱した方がええんですわ。」

あたし「わかりました。なんか当時は、読んで頭の中に入れるっていうことに集中ができなかったんで、逆にコンサータとかあつちの方のなかになって思ったんですけど。」

先生「あー。」

あたし「それって逆なんです、か？」

先生「うんまずは、あーね、こう、ちよつと暴走気味やなっていう、発想でとりあえずまず、ブレーキをかけるっていうかそんなにこう勢い出せないように、まずしてみる。いう事が先かな。あの、コンサータとか飲むっていうのは、あのーもうちよつと、実感表現難しいけど、あの、色んなものに注意を向けるだけのエネルギーは十分ありすぎる状態なんよな。」

あたし「あー。」

先生「だから一個一個のことをその、気が付いて考えようとはできるけど、考えられないまま、次の事が意識に昇るじゃなくて、これもやれてしまつてもやれてしまつていつのを、一個一個踏み越えながらあの、踏み込み過ぎながら移りすぎちゃうって時にはコンサータ使うけど。」

あたし「あー。」

先生「うんそこはちよつとちがつかない。その、種というかその、考えた方がいい考えられる対象はいつぱい出てくるけど、それをどうこうできる間もなく次のことがいつぱい見えてくる、」

あたし「そう！」

先生「そういう時っていつのはあの、単にちよつと混乱して、頭が暴走してるっていただけなので、まず鎮めること。」

先生「……まあ、また次おんなじ事あつたらまず一旦、安定剤飲んだほうがいい。」

あたし「わかりました。そうですね、うん、それが、一番気になった点としてあつて。」

先生「ふーん。」

あたし「でもなんか、こう、それ以外の点に関しては、こう、身体の反応的にはあんまり、まあ、特異なことはなかったかなあつていつ。」

先生「うんうん。」

あたし「感じーです、ね。あ、一回眠剤飲むのを忘れて、全然寝れなくて、あれ飲まないといけないなつて実感したことはあつたんですけど、うーん……」

先生「今の眠剤ってなんやつたけ。」

あたし「えつとー、あの、あれだ、オレンジ色の、名前忘れたなあ。オレンジ色の。」

先生「丸い？楕円？」

あたし「楕円。楕円の、なんか、徐放剤、の錠剤。」

先生「え、楕円で徐放剤、徐放剤……」

先生「徐放剤、チックな感じでした確か。あーの、なんか今まで、試してなかったタイプの、その、鬱軽減系の、薬を、」

先生「リフレックスとかかな」

あたし「えつとー」

先生「レメロン、リフレックスではなく、楕円形、トラゾドン、」

あたし「えつとー、いや、トラゾドンではなくて……あのもつ一個はなんか、すごいちぎりにくい、アルミで全部覆われてるような、」

先生「ほう。ああベルソムラか。」

あたし「ああそうです。そうそうベルソムラ。ベルソムラの、なんぼやつたかなあ、20、」

先生「うんうん。」

あたし「と、あとー、その、」

先生「オレンジ色の徐放剤……なんやろ。」

あたし「オレンジ色、で、」

先生「オレンジ色っていつたら普通マイスリーかなつて一瞬思っけどちゃうねなあ。」

あたし「えーつと……あ！今あるかな、」

先生「お？」

あたし「あ、ありますわ。これですね。」

先生「ああーあーこれは思いつかんかったごめん。確かに徐放剤やんなこれ。」

あたし「はい。これなんか、いまいち、あー、眠るためとしてあの、服用ですけど、」

先生「うん。」

あたし「調べてもいまいちなんかこう、どう反応してるのか、分かんなくて。」

先生「それはね、あのもともとはあの、抗精神病薬、なんですよ。」

あたし「はい。」

先生「で、あのその時の作用は、あー頭の働きを止める、」

あたし「ああー。」

先生「やつです。であー、おんなじ成分なのに、あの徐放剤にして、そうもともと鬱の、その気分のしんどい時も、多少効く、まあしんどさを和らげるって意味でね、元気にはしないんやけど。」

あたし「はい。」

先生「つていつのが分かったたので、その、あの薬の名前と、徐放剤っていう作り方を変えて、鬱の薬っていう風に出しなおしたっていう部分がある薬なんですけど、」

あたし「あー」

先生「あの、基本は、頭の働きをとめる、」

あたし「ああ。」

先生「過剰に興奮するとか、そのー、どうしてもあのくすぶるような、感情があるときに、しんどさを、一旦は、あの神経の働きを止めることで、打ち消しておいて、良い部分が出てくるように、あの脳の働きかたのバランスを整えてあげようみたいな、薬になるかな。」

あたし「ふーん、あー系統としては、あれですかあの、前飲んでたオランザピン。」

先生「あつ、まさにそんな感じ。でもともとこっちの成分の方が、あのー頭の止められ方が、あのすごい軽いつていうか、」

あたし「あああー。」

先生「評判はいいのよ。」

あたし「そうですね、あのオランザピン飲んでた時はなんかほんとにどんどん、こーう人形になっていく感じがしてたんで。」

先生「うん。」

あたし「でもこっちは、そんな。」

先生「だから止められるというか頭の、機能がなんか、欠けたみたいな感覚になるつていうのはこっちの方がはるかに少ない、」

あたし「うん。」

先生「止まり方するんです。」

あたし「なるほどなあ。」

先生「うん。」

先生「でもその二つやったら一回抜いて寝れなかったつていうのは確実にその、あの反動で寝れないじゃなくつて、」

あたし「はい。」

先生「あのー薬、で、神経を鎮めないと、」

あたし「うーん。」

先生「薬が抜けたことの問題じゃなくつて、薬が必要な神経の状態であのー睡眠薬必要な段階、状況なんやろなつて感じがあるから。」

あたし「ああ。」

先生「そこはあの、いや、薬が反動で、抜けた反動で寝れないつていうだけやったらもしかしたら、うまくしたらあの、減らしたりやめたり、」

あたし「うん。」

先生「できる道が見つからなくなつてなるけどその二つで一回抜いて寝れないんやつたら」

あたし「はい。」

先生「まだ、まだまだ。」

あたし「うんうん。」

先生「まあ状況とかまあ生活環境とか色んなものが、変わりきるまでは、」

あたし「はい。」

先生「あの、やめん方がええつていう風な、ことになるやろな。」

あたし「うんうん。……それで、あの一応処方は、寝る前なんですけど、」

先生「うんうん。」

あたし「あのーイフェクサー以外は。」

先生「うん。」

あたし「寝る前に飲んだら、朝ほんとに活動できないんで、あのー、九時くらいに、」

先生「はいはいはいはい。」

あたし「飯後にこれを、イフェクサーを飲んで、九時くらいにこの、」

先生「ビブレッソ」

あたし「ビブレッソと、あーの、あれですね。ロフラゼブでしたっけ。」

先生「ああ、メイラックスのやつね。」

あたし「の、これを九時くらいに飲んで、」

先生「うん。」

あたし「で一時間後くらいに、これを飲むつていう。一〇時くらいに。してたら、まあ朝活動できるかなつていう、感じの、そう最近服薬サイクルを見つけて。」

先生「うん。うんいい調節やね。」

あたし「はい。であんまり、あの、八時とか七時に飲んでると、あの、まあそれでもなんか、五時、六時前とか、六時半とか多分、一回目が覚めるんですけど、」

先生「うん。」

あたし「まだ、あの寝れる。」

先生「うんうんうん」

あたし「もう一回。でももうちょっと、前、七時とかに飲んでると、」

先生「うん。」

あたし「四時とかに目が覚めて、」

先生「あー。」

あたし「それからもうずっと寝れないみたいな、感じになってたんで。」

先生「それは早く飲めば飲むほど切れ目がちゃんとわかんねや。早まんなやね。」

あたし「ああはい。」

先生「ふーん。」

先生「あのまあ、きわどいところなんかうまくおつてる感じやな。」

あたし「うん、ちよつと、あの使い、慣れしてきた、感じはあるので。」

先生「うんうんうん。」

あたし「まあまあまああつて感じて。」

先生「でもその合わせ方は、うまくしてもらった感じやね。」

あたし「ふーん。」

先生「うんうんうん。なるほどね。」

あたし「そう、そんな感じですね。」

先生「……うん。それはまあ今の続けていって。まあ忘れたらいかんね、薬。」

あたし「はい。そうですね、ほんとに。あと、あ、そう今、あの、頓服で、

貰ってるのが、メイラックスの0.5なんですけど、」

先生「メイラックス？」

あたし「あ違うメイラックスじゃないわ、エチゾラム、エチゾラムの0.5なんですけど、」

先生「うんうんうん。」

あたし「あのー、一番最初ここにもらってたのって、」

先生「うん。」

あたし「0.5でしたっけ1でしたっけ」

先生「0.5、0.5。ここは0.5しかないからね。」

あたし「なんか、あーの、まああの時の、飲んでた時の、感覚のブレが、ブレというか、攪乱され方が、だいぶ動的だったっていうのもあるんかもしれないですけど、」

先生「うん、うん。」

あたし「あのー頓服として飲んだ時に、その、院試前の時ほど、こつ、」

先生「うん。」

あたし「身体が、こつ、スツと、ストーンと落ち着くような、感覚、あそこまでこつー、落ち着ききる感覚がないなあつて。」

先生「んー。」

あたし「感じだったんで。」

先生「えつと、あのー今、その半錠飲んでるやつ、」

あたし「あ、はい。」

先生「あの、あれが本来は、あのーデパスの、ちよつと改良版。」

あたし「うんうんうん。」

先生「で、ただ長時間型で効き目がほとんど一緒なんですよね。あのー、ペー

スにその成分が入ってる状況で、」

あたし「はい。」

先生「それでもまだ神経が反応してる、っていうところになるので、あのー、

要は全ク0の、なにも薬がない状態で薬が初めて入るっていうのと違い

もあるし、」

あたし「あーあー」

先生「そのベースにあるにも関わらず薬飲まなあかところまで、」

あたし「あーなるほど。」

先生「神経が高ぶってるっていうところでの、あの、薬飲むっていうところもあるの、そのー、対象となる状態も、ちょっとあの違うしこの落差も全然違ってるっていうところがあるから、効いた実感としては前よりも、あのちよつとぼやける感じには、どうしてもなっていくかな。……んーでもあの、それはちよつと薬慣れしてしまってるそこもあるかな。」

あたし「あー。」

先生「んーそこはあの、もうちよつとシャープなというか切れ味を求めてって言ったなら、もうちよつと強い安定剤ってあるので、」

あたし「はい。」

先生「その頓服、不十分なんで何とかありませんかって言ったら相談はできると思っただけど、対応はしてもらえと思うけど、あのーそこまでの事が、要は、あのちゃんと収まるとかもっときつい効き目でない、その場を自分があの収めきれない乗り越えきれないっていうのになるんだつたら要求したらいいだけで、まあ何とかなる程っていったら、強くし過ぎない方が、」

あたし「ああですよね。」

先生「いいと思うね。」

あたし「いやまあ、それこそあの面接のときに、」

先生「うん、うん。」

あたし「あーの、院試勉強してる時とかは、なんかもうほんとに、緊張の種すらなくなってる、むしろ、あーもういいや眠てえー寝ようー」

先生「あははっ。」

あたし「ねむくなってきたあつて、ちよつと一〇分か一五分寝よって感じになってたんですけど、面接前飲んだ時はまあ、あのまあ多分、おそろく、こつ……僕も、まあ、分かんないですけど、その、感覚が、長い間、なかったの、」

先生「うん。」

あたし「あーおそろく正常な範囲の緊張感？」

先生「うんうんうん。」

あたし「こつ健全な、人が、緊張するってこんな感じなんかなあみたいな感じの緊張感、で収まって、でまあ、あの、手が震えることもなく、なんか、そんなになんか身体が反応することもなく、殺されるような、緊張感というか、」

先生「うん。」

あたし「そついう命の危険を感じるような、ものではなく、多分、多分まあ、こつ健全な緊張感なんかなあつていう感じだったんで、まあまあ、いつかっと思つてそのまま、面接に臨んだんですけど、うん。」

先生「まあ、そついう風なあの、感覚やつたら、」

あたし「はい。」

先生「あの、その形で臨むつていう、選択で間違つてない気がするけどね。」

あたし「はい。」

先生「ただまあどつかでその緊張してる故に失敗したかもつていうようなこと経験しちゃうと、まあ飲んどこかになるやろつけど、それはなつてから考えて対応していくつてかんじやねえ。」

あたし「そつですなえ、はい。」

先生「……まあでも、薬は、まあまあ、おんなじ形で続けるのが今一番事やねきつと。」

あたし「うん。」

先生「じわじわよくなつていつていらなくなるつていう変化が起きるつてことはあつてもいいんやけど、」

あたし「はい。」

先生「まあ、この先すこく大きく生活環境が変化するはずやと、思つと、あたし「はい。」

先生「じわじわよくなっていくのを待つよりも、そういう変化が来る方が時期的にきつと早い。」

あたし「うんうん。」

先生「それから、まあその変化が起きた後自分がどんな風にその状況にフィットするかっていうのを見た上で、薬の相談するっていうまで、」

あたし「はい。」

先生「まあ、何も考えずに続けとけばいい気がするね。」

あたし「んーいやそうなんですよ、薬大事やなあって……」

先生「うん、ほんまにあの、反動が来るだけで寝れない薬とかがあるから。」

あたし「あー。」

先生「それだったらあの、逆にやめるチャンスかなって思ったけど。ちよつと違ったね。」

あたし「そうですねえ。」

先生「んー、まああの、今度、忙しいねんな？だから。あの一、来週？試験を受けて、ちやうわ結果が来て、」

あたし「そうですね。」

先生「で、一七日をどうするかになんねんね。」

あたし「はい。まあでもそこは、なんか、生協の人に聞いて、ダメだったら

まあ、両方もうブッキングしてしまつて、どっちか選ぶしかねえつてなつたらまあ、そうするしかないん、で。まあそうするんですけど。だから

なんか、それこそ、今までは、こつ、可能性が、」

先生「んー。」

あたし「ちっちゃい可能性がいっぱいあるからそれに踊ら、されてた、だけつて感じなんで、別に、実際事象、現象だけ見て、考えてしまやあ、ブツ

キングしたら、選ぶ。しなかったら両方受ける。」

先生「うん。」

あたし「だけなので。」

先生「そやねえ。」

あたし「はい。んー、で、別に、あの一対策も、もう筆記、は全部終わったんで、対策することもないんで。まああとは、いつも通り、まあおそろく、あの一日常から頭を回してない人間は多分対策しないといけないですけど、」

先生「ふつはつはつはつはつ」

あたし「てかあの一、なんか、就活の、軸を、」

先生「うんうん。」

私「ちゃんと自分の中がかみ砕いて持つてない。あの、私は、そんなことはまあない、ないというか、ないじゃないですか。」

先生「まああの一、ある程度色んなことを自覚した上で、」

私「はい。」

先生「希望してるとか言えるもの持つてるっていう感じはあるもんね。」

私「はい。」

先生「うん。」

私「でまあ、なに言われてもこつ、んーまあ答えはできるので。」

先生「うんうんうん。」

私「あとはまあ緊張しないように、メンタル持つていくだけかなあって感じなんで。んーあとなんか、なんかあつたかなあ。……ああなんか、まあこれはなんか多分そんなに、おっきい問題には発展しないんですけど、」

先生「うん。」

私「あの一、それこそ、その、あの一頭が、暴走してる日に、ネットの訪問の人が来て、あ一の、」

先生「ネットの訪問？」

私「ネット回線の、アパートの、」

先生「ああ、全体で、やってる回線の。」

私「はい。乗り換え、多分あの、終わった後に、違つところへの乗り換えの奴だったって気が付いたんですけど。」

先生「はいはい。」

あたし「まあ別に、それで、いまあたしが使ってるプラン、学割切れてたっ
て思ってた、あの、ネットの、要は料金下がりますよって。」

先生「うんうんうん。」

あたし「でまあ、その人が全部把握してるような言い方だったんで、あ、そ
うなんやっと思って書類書いて、SMSで母親に概要を伝えたら、学割
がまだ効いてて安かったのでキャンセルをしたことがあったんです
ね、で、母親とSMSである程度やり取りをしたんですけど、まあ、その
あと、速達が来てて、昨日くらいに。まあでもこれは写真撮って見せて
もらいたいなって思ってたんですけど。内容が、なんか、完
全にキャンセルしましたって送ったんですけど、なんか、あの、乗り換え
のこととかなんか、こう、自分のなかでこうこう思ってるみたいなのが
うだうだ書いてあるだけで、なんかある種、あれなんですかね、うちがま
だ、多分こう庇護下にいるみたいな感じのを、意識してるかわかんない
ですけど持ってた、こうちが能動的に動いたから。」

先生「うん。」

あたし「なんか、私の、力の及ぶというか、及ばせれる、領域はまだあるん
やみたいなのを。」

先生「あー。」

うち「うちに提示したかったんかみたいな、深読みすればまあ、そういうこ
ともみれるかなあって。」

先生「うーん、そう、そういう方向なんかな、なんか、あの、自分をこう受
け入れてもらえるとか、」

うち「ああ。」

先生「自分の正しさを、またあの、証明できるというかあの、」

うち「うんうん。」

先生「保証する、材料に子供が使えると思って、」

うち「うん。」

先生「嬉々としてこう、絡んできたみたいな押し付けに來たみたいになよう
な、イメージをちょっと持っちゃうけど。」

うち「あーあー、こう、そう、そうですねなんか、結局、うん、そう、じゃ
ないすかなんか、自分が正しいから。」

先生「うん。」

うち「こう、うちを自分の傘下に入れとけば、うちは全部正しいみたいな。」
先生「うん。まあ傘下っていうか、んーそやねまあ、上下がどうなるか分ら
んけどでもなんかあの、私が正しい、あの、あのなっていうか、自分で
言うんじゃない証明を、子供でできるみたいな。」

うち「ああ。」

先生「道具になってる感じはあるよね。」

うち「なんかこう、最近の彼女の事は多分、先生の方が知ってるんですけど。」
先生「はっはっはっは、ふふふ。でもまあ、ちょっと何回か喋っただけやけ
どね。」

僕「あーの、それこそ、んー、僕が、ここに通い始める前、くらい、まで
の、あの人の、親というものの認識、」

先生「あー。」

僕「は、あのー、保護をする人間っていう、過剰、過剰っていうか、病的なま
でに保護をする人間。」

先生「うんうんうん。」

僕「なんかこう、対等じゃないんですよ。」

先生「うんうん。」

僕「対等じゃなくって、あの、特に中学辺りくらいまで、」

先生「うん。」

僕「は、こう、子供は無条件に親の言う事を聞くものだみたいなことを無意
識に行っている。」

先生「うんうんうんうん。」

僕「……でそれがおそらく続いているんですよ。続いているというか、まあそ
のイメージがすごい強くて。」

先生「はーはー。」

私「私のなかで。」

先生「うん。」

私「そういうので、まあ今回の件も、そつ、そういうところ。」

先生「うん、ふーん。」

私「が、見て取れるのかなあって感じで。」

先生「なるほどなあ。……過去の流れから汲むとそういう風に解釈できる

ところは確かにありそうやね。」

私「はい。ただまあほんとに、ここ数年の彼女のことは僕は全然知らない

んで。」

先生「なんかあのー、子離れを、するようになるとか、んーお母さん自身の存在が、あの毒になるかもみたいなことが、まあ僕が話すスタンスってそんな感じじゃないですか。」

私「はい。」

先生「そういうことをなんかあの、お母さんがあの、ほんとに自分が悪かったとか間違ってるって言わずに、飲み込もうと。」

私「あー。」

先生「するときは、その折り合いのつけ方っていうのは、あの、支配的、っていうことではもう持たなくなってる。」

私「ああ。」

先生「のはやっぱりあって、うん、ちょっとこつ、いや本当は、あの優位に立つというよりも、なんかあのー田所さんよりも自分の方が、何が正しい何がうまくいくって知ってるから、あたしの言うとおりにやったらうまくいくっていう、発想で押し付けたがるけれども、ちょっと、まあ僕が介入して以降は、あのー、あんたは、あの子供に、あの、もう及ばんとこるまで、あんたの子供は変わってしもつてんねんっていうような、切り口で言うてるのでまあ僕に対する、あのー、その僕とのコミュニケーションを上手くやるための、」

私「はい。」

先生「仮面かもしれないけど、なんかあのさういう、自分に何かしら優位性があると思って、ふるまっていってという態度はもつ、僕にはあんまりみせなくなってるな。」

私「あー、なんか、ほんとに、あの、こつ、んー、まあほとんどの人間がさうだと思えますけど、こつ権力っていうものを日常生活に、落とし込んでるといふか、」

先生「うん。」

私「それありきで、生活していつてるといふか、こつ歳、歳の差であつたり、金であつたり、それをあたかも力だと勘違いして、」

先生「そうね、まあ、今は日本ではだいが、少しづつ特に都会では薄れてきたけど、まあそもそも男女、の違いだけで、」

私「うんうん。」

先生「なるからねえ。……うん。」

私「でまあ、おそらく、地で行ってるのでそれを。」

先生「うん……やっぱりこつ、なんやこつ、立場というか家庭の中の力関係というか、何の根拠がなくても自分がこつ人に、支配的というか優位性を誇示できるっていう、既得権益ってみんななんか手放さないよねえ。」

私「そつ、いやそつですなえほんとに。んー。」

先生「それをこつ、なんかフェアに、ていいうかあの、ほんとにそうなんかつて、疑問をもって謙虚になるっていうのは、完全にこつ知的に、鍛錬されないといけないやねえ。」

私「あー……うん、ほんとに、ああ、前時代の遺物だなあって思いながら、付き合ってますけど、付き合ってるっていつてもほぼ、断絶してますけど。」

先生「前時代の遺物っていうか、人間の本质はきつとそつで、」

私「ああ。」

先生「個体ごとにあの毎回啓蒙するってことをしないと、きつとそつにしかならないんよね。」

私「あーあー、そうですね。」

先生「うーん、まあ社会的にはなるべくそうなるのが正しいっていう、ことが通用し始めてはいるけど、まあ多数やっぱり、あの、そういう価値観はほんとには理解してないよね。」

私「もつ、なんか、やはりチックにこう、まあ雑な言い方をしたら、」

先生「うん。」

私「やはりチックにぽつと出てきてるじゃないですか今のその流れて。」

先生「まあねえ。」

私「風潮が。で、全然、分かってないじゃないですか実際なんか、それを取り扱った、ワイドショーとか、」

先生「うん。」

私「政治家の演説とか、役所の対応とかみてたらもつ、まあ基本的にLGBTとかの情報が入ってくるんですけど。」

先生「うんうん。」

私「あとはフェミニズムとか。ツイッターにはびこってる、内容を理解してないような、アカウントとか見ると、まあまったく違うこと言ってるとか、いやちゃうやんお前らなって……」

先生「うん、あのでも、既得権益とかそういう権力闘争の、反動もあるけど、これまでその、普通に扱ってくれとか、ただその、権利とか尊厳を認めてくれっていうだけで済む、話を、」

私「はい。」

先生「するべき人たちが、結局、権力闘争の枠組みの中で、あの運動してしまつて、あの自分たちでも分かってないやんっていう風な、結果になることはたびたびあったからね。」

私「あー。」

先生「なんか、それに関してはあのー、なんかどちらも、不勉強つてのがあるかなあつて思う。」

うち「……なんかほんとに見てて、なんか、まあうちもそんなに、周りの人間ほど、きちつと勉強できてないですけどまだ。それでもわかるヤバさが、」

先生「ふふふふ」

うち「すごい、というかまあそれが今の流れの大多数にあつて。」

先生「うんうん。」

うち「なんかもつと、そう、根本の話をしたらなんか、権力、とか、印象操作とか、」

先生「うん。」

うち「なんかこう吉本の事件と、選挙と、なんかおっきいのが二つあつたじゃないですか。おんなじ期間で。」

先生「うんうん、うん。」

うち「で、なんかもう全部、ちゃんと追って行って、」

先生「うん。」

うち「選挙の事とか全部調べて追っていったら、」

先生「うん。」

うち「え、いや、や、ヤバい、としか言いようがない。」

先生「はははははははは。」

うち「いやなんかほんとに汚いことしかやってない、し。」

先生「うん。」

私「それこそ、吉本の件に関してはなんか、もつ、もう、社長ヤバいし。」

先生「うーん。」

うち「あの、やり方が。」

先生「結局その程度の人間でも、あのそんな上まで行って社会回せることになんねんなつていうもの、まあ悪い例やんな。」

うち「あ、はい。あと、あの、選挙期間中の、あの、演説で、」

先生「うん。」

うち「野次飛ばしただけで、野次飛ばしただけでそう警察が、動いて警察に連れていかれたあれ見て、」

先生「はっはっはっは。」

うち「ヤバ、え、ヤバっ！って、独裁政治ひいてるやんって。」

先生「ああ、まあ、んー色々あるけどな。いや野次に関したら、うーん、まあ、反対側もあつたしなつてのもあるしねえ。うん、ていうかまああの、結局、あのー、野次に関してはあの、警察やつてくんのは極端やんって思う反面、」

うち「はい。」

先生「なんかあの反体制活動、」

うち「ああ。」

先生「みたいなこと、に、主眼が置かれてしまつて、」

うち「うーん。」

先生「あのー昨今政策論争でどうこうではなくって。」

うち「あー。」

なんかあの

先生「邪魔したろうだけの。」

先生「気に入らんから、あの邪魔して排除して、なんかちよつと、まあ共産党的な、言えばその革命を成し遂げようみたいな。」

うち「うんうん。」

先生「なんかそつという問答無用のこつ、力の、なんか、なんかあの、行使みたいなのが出てくる場面はあるので。」

うち「はい。」

先生「まあある程度ちよつと、にらみを利かせる必要もあるよねとは思つたけどな。」

うち「ああ。」

先生「んー、全員、全部が全部あのー、野次飛ばしたらいかんって言つんやつたらそもそも国会の中で、議論してる人間、議論してる人間が一番野次飛ばしてるんやけどな。」

うち「いやあ……」

先生「うん。」

うち「え、逆の、なんかほかの政党に、野次飛ばしてる、の、あと、あの、なんか、プラカードとかあげてるのは、全く警察取り締まらない……」

先生「はっはっはっは。」

……

うち「あーやばって思つて。あとは、あれですよ、なんか、こつ、あーの、候補者が回つてるところに、」

先生「うん。」

うち「旅行バスが、二、三台、」

先生「ああ。」

うち「ついて回つて、降りて、プラカードみたいななん渡されて安倍政治賛成みたいなプラカード、で、ああそつ、プロ市民の方々なのかな？演説の前で。」

先生「はーはー。」

うち「こつやつてみんな、掲げてる。で、それが終わった後に、中身が何かは知らないですけど、モノが配布されてるんですよなんかちよつちやい。」

先生「えーそれはもうほんま選挙法違反やんね、なんかにしても。」

うち「まあ中身がなにか、押さえられてないから何も言えないですけど。」

先生「うん。」

うち「もし、あの現金じゃなくてもティッシュでもだめじゃないですかあれ。」

先生「そうね、うん。」

うち「換金性のあるものだったたら全部だめじゃないですか。」

先生「うん、うん。」

うち「んまあ、もし、その、ポチまあポチ袋みたいなやつだったんですけど、」

先生「うん。」

うち「ポチ袋オンリーでも、中に何にも入ってなくても極端に言えば換金性があるってなつてしまつから、」

先生「うんうん。」

うち「えダメなんじゃないって。」

先生「うん、そうねえ。なんか協力してくれてありがとう感謝みたいなんだけやったら別やけどねえ。」

うち「まあ、そのなんか、バスに乗ってる人間と、」

先生「うん。」

うち「その、候補者が、あの完全に繋がってるかどうかの証明もなされないっていつのこともありますけど。」

先生「まあ、まあね、誰がやっても、でもなあ。」

うち「はい、まあそこはもうなんかもうトカゲのしっぽ切りみたいにしたらどうともなるじゃないですか。」

先生「うんうんうん。」

うち「したらなんかそもそも今持つてる権力を、いっぱい、金と権力をもってるやつらがやっぱりどんどん、設けていく仕組みになるんやなあって。」

先生「ああ、まあでもそんなことをやってほんとにみんなが先導されればね。」

うち「うん、いやあでもまあ、結果、見てもある程度多分先導、先導されてるじゃないですかあ、あれ。先導、されてない人間が、一〇〇%だったら、文句は、」

先生「いやあ、でもあの、民主党政権でこりこりしたっていうのは本当にまだ引きずってるところはあるわねえ。」

うち「ああ、いやあですよ。はい。なんか、その辺も色々含めて世の中の人間ほんとに何にも、情報を仕入れないしものを考えねえし。」

先生「うん。」

うち「こつ、何も、そう見えるものしかみねえんだあってひしひしと感じて、」

先生「ふふふふふ」

うち「その二つの、事件を見て。ああ、しょうもなくて。こんな世界におってやる義理ねえわっていう、考え方がまた、」

先生「うんうん。」

うち「より一層、こうメーターが、ドゥルルっと」

先生「ふふつ。」

うち「たまった感があります。」

先生「うーんでもそいつらに直接の被害をこつ、こつ受けたらこつこついう発想はあっていいけど、」

うち「ああ。」

先生「いやねそいつらと付き合うために生きてるわけ違うけどねえ。」

うち「ああーそうですねえ。」

先生「うん。」

うち「ああ、そつかまあそつだよなあ。」

先生「なんかあのー俺の目に入るものが汚いってのと単に俺が不愉快、不快やわっていうことに関しては、」

うち「ああ。」

先生「なんか自分の人生邪魔されてるわっていう感覚はちよつと出てもいいとは思うけど。」

うち「ああ、うーん、やなんかこつ、うーん、不快、うーん、不快なんですよねえなんかすげえ、こつ大雑把で、暴力的な言い方したら馬鹿嫌いなんで、好きじゃない、ねーまあこつ、あの、バカにこの、うーん、今

ですげえ迷惑をかけられてきてたんで。」

先生「んー。」

うち「馬鹿嫌いなんですよ。そう。」

先生「たぶんねえ、それはあの、また、こんなこと、言い方がちよつと申し訳ないけど、あの一時期あの、大体あの、そんなことになる。」

うち「あー、うーん。」

先生「うん。で、それあの通り過ぎるねんいつか。」

うち「ああ。」

先生「馬鹿大っ嫌いっていうのが、あの……なんか、反応しなくって、あのー、スルーして、っていう風に、やり過ぎて、も、そのー、それ以上に、あのー自分の世界っていうかまあ馬鹿じゃない人たちの関わりとか、」

うち「うん。」

先生「まあ自分の居場所の整備とかが進むとかっていうのが起きると、そういつ、そこをなんか世界のあるところにあるけど、関わらずに、あのー自分の生活はそこそこの、あの、居心地の良さで作れるなあみたいなの。」

うち「ああー。」

先生「ことができてきたら、あの、関わらないように生きようっていう、あのー知恵は、ちよつと使うけど。」

うち「はい。」

先生「あのーいちいち反応してやる程の、」

うち「うんうんうんうん。」

先生「あの生き方っていうか、あの労力って、」

うち「はい。」

先生「実はいらんねんっていうような、あの、どこまで行けるわ。」

うち「はー。」

先生「んーいやあのー実際色んなところで、どうしても関わらなあかん時に馬鹿がいるっていうのはいつでもあることあり得る事やねんけど、」

うち「はい。」

先生「あのー、そういうやつとのやり取りを、自分がしないと生きていけないっていう事に、ならずに済むっていうような生き方って選べるのよね。」

うち「うーん。」

先生「んー、それはね、あのー、いずれ終わる。その、馬鹿を許すでもなく、」

うち「はい。」

先生「自分があるのー、馬鹿を愛せるようになるでもなく、」

うち「あー。」

先生「うん。なんかあのー別の、あの、ところで生きてたらかもういいやつて、いつてそれはそのー、受け入れるとか許すとかじゃなくって、もうあのそんなもんなんやろって言って、なんかあの、フーンって言って、それ以上の意味付けとか、あの、関連性の整理とかせずに、終わらせれるようになったちゃう。」

うち「ああ。」

先生「うん。あのー、でも、その前にだいぶ、その馬鹿嫌いて言って本気で憎んだり腹立てたりするひと手間って、残念ながらいるんよ。」

うち「うんうん。」

先生「その先に進むために……でもあの、感覚は、あの僕は、全然間違っていないと思うよ。うん……だって言ってもわかんないし、変わってもくれないんだもん。」

うち「うー、いやあそうなんですよねえ。ほとほとあきれ果てる。」

先生「うん。なんかそれが自分に影響を及ぼすっていうことがあり得ること自体がもうそもそも、許しがたいっていう風になっちゃうので。」

うち「はい。」

先生「うーん、で、あとそこに反応するとか自分が、なにかこう、影響を受けるみたいなのがなくなっても、まあいずれ、自分の生きてる場所とか生き方、に関しては、あのーそこなしで、成立させられてるっていう風に、言える日が来ると思う。」

うち「うん。」

先生「こつ、上手くやっていこうじゃなくって、なんか馬鹿のコミュニティとか、馬鹿の世界・文化っていうのはあるんだな、ふーんで終わる、みたいなね。」

うち「うーん。」

先生「まあそれとこうなんか、自分なりの、その、もの、受け入れるとか自分が満足できるもので、違うものがちゃんと自分の周りに用意されてし

まうのよ。いずれ。同じように生きてるはずなのに、なんかあのー、絶対あんなん嫌っていうのと、あの似たようなこと、自分はこれがいいわっていうのが、おんなじ、全くおんなじことをしてるような、あの見え方で、勝手に、あの成立するっていう風な、ことが起きてくる。……それをなんかある意味生きる場所作りっていうか、自分で生き方決めるっていう事かなあって思ってるんね。」

うち「ああー。」

先生「あのー、うん、すごい、大事な、健全な感情なので。」

うち「はい。」

先生「これは、こう、こういう場所で言ったらいかんこと、特に田所さんに言うべきことじゃあんなないけど、基本その、なんか馬鹿を憎むとかっていうことから始まって、さっきの特権意識じゃないけど、人を蔑む差別するとか、あの嫌うとか、あのー、不寛容になる、っていうのって、本能的に必要な感情なんよね。」

うち「ああ。」

先生「ある程度。まあそこをあのー、折り合いつけるといいうか、ある、そういう気持ちが考え方反応の仕方が良くないっていうと、それこそ白痴になんのよな。」

うち「んー。」

先生「なんかあの、博愛とか平等とか、そういうこと言うてはみるけど、その宗教みたいな、もんで、無批判にすべてを、容認しよう、っていう風に、そんなことをすると、あのー、自分で考えることをやめただけやないか。っていう、ことになっちゃうのよな。」

うち「うん。」

先生「やっぱりそういう事をそのー、悪い感情とか反応も、込みで、自分が、自分の中でそれが、自分にとって正常とか、自然とか、正当性がある。っていう風に、考えることでちゃんと構成されることが大事。なあ。まあそれに今の、感情を、あの、言ったらいかにことやるなという風に、なんか気が引ける方向を勝たせるんじゃないくて。」

うち「はい。」

先生「あの自分の、そう思う事はでも自分は正しいから、そこを進めるしかない、言う風になる方が、まあ自分にとって、絶対的に正義なんよね。」

うち「んー。」

先生「まあそれがあの、田所さんの場合はあの、人を踏みつけようとか、自分の権力を、あの大きくしようではない、っていう事をわかって、やれてるから、まああのうまく辻褄が合う形で、あの納得いくように、作れると思うので、あのー、なに、はた迷惑でない形だね。」

うち「うん。」

先生「だから、良いことやと思うけどね。……うん。まあ、ちょっと世の中で事件とかそういう神経の動きがあると、いっぱい矛盾が目につく、目に付くといつかあの、考えの、思慮の浅さが目に付くよね。」

うち「はい。」

うち「やあそうなんですよねー。ほんとに。」

先生「それがあの、分かってしまつ、時点じゃあないわ。」

うち「ふふふふっ」

先生「はっはっはっは」

先生「分らない幸せがあんねんっていうのを」

うち「んー。」

先生「横目で見ながらね。」

うち「そうですね。まあ、数がいる以上、仕方がない。」

先生「ほんとに、色んな、あの、性質の人間が、あのうまいこととして散らばるようにしか設計されてないの。」

うち「うん。」

先生「良いものが、あの増えるようには設計されてないっていう風に、まあ受け入れなあかんからねえ。」

うち「はい。」

先生「まあ、まあぼちぼちと。」

うち「はい。」